

『漂客談奇』と『漂異紀畧』の違い

中浜万次郎研究の一次資料として標記の2つの文献は、万次郎研究者たちから熱心に研究されており、活字化されている。県立坂本龍馬記念館が平成25年(2013)に『漂異紀畧 大津本』の刊行をおこなった。これはA4判で上段に原文のコピーを下段にその活字を印刷し、挿絵なども掲載した活字本である。また、平成30年(2018)に土佐史談会評議員(関東支部)で、NPO法人中浜万次郎国際協会の北代淳二会長が監修し、同会会員の谷村鯛夢(和典)氏が現代語訳した『漂異紀畧 全現代語訳』(講談社)の文庫本が発刊されている。

『漂異紀畧』には、遭難以降の万次郎の動向と米国生活、当時の米国や我国の時代様相、近世から近代にかけての米国研究等の資料として大変価値ある史料である。

昨年、『漂客談奇に学ぶ漁人万次郎』(西村膳写堂)を出版し、第65回高知県出版文化賞を受賞された土佐清水市足摺岬の遠近菊男氏は、『漂客談奇』をもとに万次郎の研究をまとめられている。

それでは『漂異紀畧』と『漂客談奇』とにどのような違いがあるのだろうか。また、『漂異紀畧』にはどのような内容が書かれているのだろうか。ここで簡単に説明させていただきます。

帰国した万次郎ら3人の幕府の正式な取り調べは、長崎奉行所で既に完了していた。土佐藩では、重ねて取り調べや尋問を行うというより、海外での貴重な生活の様子について、知りたいというのが実際のところだった。この情報をまとめ、その知識を学ぶことにより、難しい幕末期の世界情勢を読み、土佐藩の今後進むべき方向性や藩士教育の材料として活かしていきたいというのが本音だった。

『漂客談奇』『漂異紀畧』ともに「客」の字が用いられている。これは、鎖国を破った咎人を尋問するという意味ではなく、あくまでも万次郎ら3人を「客分」として扱い、その貴重な遭難体験や米国生活を聴かせてもらうという意味合いが強かったことをあらわしている。県立坂本龍馬記念館の刊行した『漂異紀畧 大津本』の解題にも「“客”という語句には、万次郎への敬意が込められている」と解釈している。

土佐藩では、吉田正誉(子英)が中心となり万次郎らの聞き取り調査がおこなわれた。調査で困難を極めたのは、万次郎らの言葉の聞き取りであった。日本を離れてかなりの年数を経て、日本語よりむしろ英語の方が上手く話せるようになっていた3人は、幡多弁の崩れた極めて強い方言の日本語しか話すことができず、土佐弁の子英は、それを上手く聞き取ることができなかった。加えて、子英自身が海外文化・文物につい

ての知識があまりなかったことも、聞き取りを円滑に進めることができなかった要因であった。そこで、子英は、聞き取りの支援を河田小龍(土佐藩絵師)に命じ、小龍は調査に加わることになった。

河田小龍は、吉田東洋の推薦で長崎への留学経験があり、海外事情に精通しており、当時、藩における新進の知識人として著名であった。小龍の協力もあり、吉田は聞き取り調査をまとめ、これを『漂客談奇』として著わした。子英は、この序を吉田東洋に依頼した。東洋は、英語を理解し、多くの最新の知識を有した万次郎に深い敬意を込めた序をあらわしている。

このときの調査が縁となり、万次郎の知識をさらに聞き取りたいと考えた小龍は、藩に許可を受けて自宅に万次郎を滞在させ、寝起きをともにしながら、熱心に聞き取りし、『漂異紀畧』を書きあげた。豊富なイラスト入りのノンフィクションがこうして誕生したのである(小龍28歳、万次郎25歳)。両史料とも、嘉永五年(1852)の秋から冬にかけて完成している。

『漂異紀畧』=4巻構成

第1巻は、冒頭に凡例と詳細な世界地図、その後本文が入る。宇佐浦から出発し、足摺沖で操業、鳥島遭難、捕鯨船「ジョン・ハウランド号」で救助されるまでの動向やそのときの5人の心情が細かく記述されている。

第2巻は、ハワイで下船した筆之丞(伝蔵)ら4人のことを中心に記述されている。彼らが帰国しようとして日本近海まで近づいたが、鎖国下の状況でそれを実行できず、やむを得ずハワイに帰ってきたことなどが記述されている。

第3巻は、万次郎のアメリカでの体験記、カリフォルニアでの金採掘、米国社会の仕組みについて記述されている。

第4巻は、万次郎が金鉞で稼いだ金を持ってハワイに戻ったこと、そこから商船に乗船し、琉球に上陸して帰国したことなど、そのあらましが記述されている。

《歴史解説》

『漂異紀畧』には、風・潮流の方向を示す語句がたくさん出てくる。北が「子(ね)」、南が「午(うま)」、東が「卯(う)」、西が「酉(とり)」です。北東が「艮(うしとら)」、南東が「巽(たつみ)」、北西が「乾(いぬい)」、南西が「坤(ひつじさる)」となる。

例えば、「坤(しら)」は南西風を指し、「乾吹(あなせ)」は北西風を、「艮吹(こち)」は北東風を指す。万次郎らの遭難では、これらの風が複合的に吹き荒れていた。

また、『漂異紀畧』の「巽」は、万次郎ら5人の乗った船が、巽の方向、すなわち**南東方向に流されて漂流したこと**をあらわしている。